

シベリア抑留問題入門 —何から読んだらよいか—

Introduction to Issues on Japanese POWs in the Soviet Union: What Should Be Read?

富田 武
Takeshi Tomita

シベリア抑留から66年以上が経過し、抑留体験者が88歳を超え、7万弱を数えるのみとなった今日、この問題はなかなか顧みられることがない。最近（2012年）NHKのTVドラマ『開拓者たち』で、満蒙開拓団の青年たちが関東軍兵士に徴用され、ソ連軍の捕虜となってシベリアで強制労働に就かされ、辛苦の末に帰還する（一部は現地で死亡、一部は中国に引渡され戦犯として裁かれた後に帰国する）一連の場面が描かれたが、珍しい機会であった。高校の日本史教科書でも、シベリア抑留という言葉が注扱いで出てくればましな方である。

シベリア抑留とは、1945年8月9日のソ連参戦により、正確には8月23日の国家防衛委員会（議長スターリン）命令に基づき、日本軍将兵ら（軍人・軍属の朝鮮人、中国人や満洲国政府の官吏等を含む）約60万人がソ連各地（極東、シベリアのみならず中央アジアやグルジア、ウクライナまで）及びモンゴルに連行され、強制労働に就かされたことをいう。ポツダム宣言に捕虜の「すみやかな送還」が謳われていたにもかかわらず、大多数は3-4年間、「戦犯」とされた者は1956年の日ソ国交回復まで抑留され、うち約6万人が飢えと寒さと重労働により帰らぬ人となった。多数の遺骨が戻っておらず、埋葬地も多くは放置され、重労働の対価はソ連政府が支払わなかっただけでなく、西ドイツ政府に倣って捕虜の祖国＝日本政府が支払うこともなかった。抑留体験者は、自分たちを「慰謝」する給付金（2010年6月「特措法」）に満足せず、政府に国としての責任を認めてほしい、そして抑留の歴史を後世に伝えてほしいと切望しているのである。

本稿は、抑留問題をよく知らない若い世代を念頭に、この問題を学習するには何を讀んだらよいか、少し知っている人がもっと分かるには何を讀んだらよいかを助言するものである。

*

*

*

まず薦めたいのはブックレット類である。出版順に挙げると、堀江則雄の『シベリア抑留』、味方俊介『カザフスタンにおける日本人抑留者』、栗原俊雄『シベリア抑留は「過去」なのか』。堀江著は、日本の満洲支配、スターリンによる国際法無視の強制労働、日本政府の棄兵・棄民政策というポイントを押さえた抑留のスケッチである。抑留の実態の記述は、後述『捕虜体験記』に依拠している。帰還後の差別や労働補償問題にも言及している。味方著は、カザフスタン留学

（筆者註）これは川西重忠編著『モスクワで日露関係を学ぶ—川西モスクワゼミ3ヶ月の記録』（桜美林大学北東アジア総合研究所、2013年）、39-55頁、に寄稿した富田武同名論文を転載させていただいたものです。

中に見聞し、研究したことを記したもので、墓地・埋葬地と日本人抑留者の建てた施設に関する説明（写真付）に特徴がある。カザフスタンはハバロフスク地方、沿海地方、イルクーツク州に次いで抑留者が多かった地域で、「徳田要請問題」（日本共産党徳田書記長が「反動分子は帰国させるな」とソ連側に要請したとされる話で、カラガンダからの帰還者が情報源。1950年春の国会で追及された）との関連でも重要である。栗原著は、「特措法」成立から遡って労働補償を求める運動と、戦争被害は「等しく受忍すべきもの」（シベリア抑留者だけ特別扱いできない）という理屈による政府・司法側の拒否を紹介したものである。また、遺骨の収集が進んでおらず、ロシア政府から厚生労働省に引渡された公文書の写しが活用されていないことも指摘している。

次は新書類で、栗原『シベリア抑留』、白井久也『検証 シベリア抑留』が挙げられる。白井はペレストロイカ期から抑留問題に取り組んできた元『朝日新聞』記者で、とくに後述する全国抑留者補償協議会（1979年結成）に密着しながらフォローしてきた。『ドキュメント シベリア抑留—斎藤六郎の軌跡』はその成果だが（1995年）、『検証』はその後の15年間の経過を踏まえて一般向けに書いたものである。敗戦直前の日本政府の現地残留・労務提供方針（和平交渉の要綱及びワシレフスキー元帥への陳述書）や「瀬島（龍三）疑惑」に叙述を割き、また抑留問題を考える上で旧軍隊の階級制度と捕虜観（生きて虜囚の辱めを受けず）の重要性を指摘している。栗原は、白井よりかなり若い『毎日新聞』記者で、『シベリア抑留』は引揚後の抑留者に重点を置き、多数の丹念なインタビューに基づいて書かれている。彼は、引揚当時の自社をはじめとする新聞の報道が不正確だったと指摘したが、先のブックレットでは「過酷な状況とはかけ離れている」、「ジャーナリズムの負の遺産」とまで言い切っている。

*

*

*

第三に挙げるべきは、抑留体験者本人の回想の類である。高杉一郎『極光のかけに』（1950年）は、バム（バイカル・アムール鉄道）沿線にあるプラーツク収容所での体験を記したもの。『改造』編集者でエスペランチストの（ロシア語もできた）高杉が、冷静な観察と鋭い分析で軍国主義及び階級制度とスターリン主義を二つながら批判したものと総括できるが、収容所仲間やロシア人との会話を中心に組み立てられている点にこの本の魅力がある（ジョーミン収容所長とは1991年に再会する。『シベリアに眠る日本人』）。

長谷川四郎の『シベリヤ物語』（1952年）は、チタ（旧ザバイカル州）の収容所での生活を描いた短編を集めたもので、ロシア語ができた長谷川は自分たち抑留者ではなく、収容所に入出入りするソ連社会の普通の人々を主人公にした点に多くの回想記との違いがある（収容所は外界と隔絶されていたわけでは必ずしもない）。それ故であろう、この本は露訳のある数少ない本の一つになっている。

『石原吉郎詩文集』は、3巻本の全集から編集し直されたものだが、収容所体験の認識が鋭い。収容所の中での連帯は、食事をめぐる生存競争のように「お互いがお互いの生命の直接の侵犯者」であることを確認し合った上での連帯である、収容所の中での失語は、他人との対話のための言葉を失うだけではなく、自分との対話＝自己確認の手段をも失うことの方が恐ろしい、等々。石原はロシア語が話せ、ハルビン特務機関に勤務したためにスパイ罪で有罪宣告を受け、8年もの間収容所や監獄を体験したのである。

加藤九祚は90歳の今も現役の考古＝人類学者だが、彼には『シベリア記』があり、そこに「わたしのシベリア抑留記から」（『文藝春秋』1970年8月）が収められている。バム鉄道の建設に従事した加藤は、ロシア人歩哨の「君たちも近いうちに帰れるさ、時が解決してくれる」という

印象的な言葉を紹介するとともに、衝撃的な事実を明らかにしている。第7（タイシュット）収容所第28分所の日本人捕虜3名が脱走し、タイガの中で2名が残る1名を殺し、その肉を食したが、捜索隊によって発見され、抵抗したので射殺されたことである。カニバリズム（人肉食）は南太平洋の戦線では知られていたが、シベリアにも存在したのである。なお、加藤著にも露訳がある。

内村剛介は『生き急ぐ—スターリン獄の日本人』（初版1967年）を著した。ハルビン学院出身の内村はロシア語を能くし、関東軍参謀部に勤務したが故に、「戦犯」とされて監獄にぶち込まれ、11年という最長期間の抑留の後、最後に日本に送還された。内村の観察は鋭く、党官僚の支配する社会と囚人の世界を見事に対比し、「ラーゲリや監獄に拘禁されている者はその肉体が奴隷なのであり、逆に、それを監視する者はその精神が奴隷なのである」と喝破する。彼は「精神の奴隷」にはなるまいと獄中生活を闘ってきたのであり、その後も「生き残って今娑婆にある者が、死者に代わって、獄中にある者に代わって、語らないとしたら、それは犯罪である」という立場を貫いたのである。

抑留体験者自身の回想ではないが、辺見じゅん（最近死去）の『収容所から来た遺書』もすぐれたルポルタージュである。山本幡男は東京外語出身で満鉄調査部に勤め、1949年に裁判で戦犯とされ、ハバロフスクの収容所（捕虜収容所ではなく、矯正労働収容所）に入れられた長期抑留者である。彼は「アムール句会」を作り、分所仲間から慕われたが、1954年8月に病死した。その遺書を7人の仲間が暗記し、あるいは巧みに隠して帰国し、未亡人に届けるという奇跡のような実話の再現である。

*

*

*

むろん抑留体験者の中には回想を残さなただけではなく、家族に話すことさえ拒み通して亡くなった者も多い。他方では、長い歳月を経、自分の人生を振り返って語り始めた者もある。回想記は、私家版も含め2000にのぼると言われているが、個々人の覚書やエッセイをまとめた大作も存在する。その最初は、在ソ同胞帰還促進会（1953年結成、1973年朔北会と改称）が1977年に刊行した『朔北の道草』全2巻である。長谷川宇一、ついで草地貞吾が会長となったように、元高級将校主導であり、帝国軍隊への郷愁と反ソ・反共的色彩が色濃いが、長期抑留者ならではの話（外国人捕虜との接触、ハバロフスク事件のような抵抗）があり、「抑留ロシア解説」も貴重である。

抑留者団体は1946年以降「在外将兵帰還促進連盟」、「ソ連帰還者生活擁護同盟」（のち「日本帰還者同盟」）、「全日本帰還者自治連盟」などが分立しながら、帰還促進運動と生活擁護闘争に取り組んでいた。1979年に「全国抑留者補償協議会」が結成されたが、日本政府に補償を求めるか否かで、求めないグループが翌年「全国戦後強制抑留者補償要求推進協議会」を結成した。通称「斎藤団体」と「相沢（英之）団体」で、政治的にはおよそ社会・共産党系と自民党系とすることができる。「斎藤団体」の流れに属する「ソ連における日本人捕虜の生活体験を記録する会」は、1984年から足かけ15年を費やして『捕虜体験記』全8巻を完成させた。「相沢団体」が政府を動かして設立した「平和祈念事業特別基金」が2005年に刊行したのが『戦後強制抑留史』全8巻である。いずれも抑留者の手記を集め、解説を付したものだが、後者がソ連の抑留責任を徹底的に追及し、「民主運動」はソ連の政治工作以外の何ものでもなかったことを強調するのに対し、前者が帝国日本政府の加担と戦後日本政府の補償責任をも問題とし、「民主運動」の反軍闘争的性格を擁護するという違いがある。資料的には、後者が厚生省（引揚援護庁）文書と最

新のロシア抑留資料集を用い、前者は斎藤が入手したロシア公文書を参照している。

右の三種の「資料+手記」とは別の意味で重要で、読まれるべきは村山常雄『シベリアに逝きし46300名を刻む』(2009年)である。抑留体験者である村山は、70歳でパソコンを習得し、ゴルバチョフが持参した死亡者名簿に加え、様々なルートで入手した死亡者名簿につき、氏名のロシア語表記を日本人らしい氏名に翻訳し、厚労省から入手した漢字名簿と照合しながら確定するという煩瑣かつ膨大な作業を積み上げて46300人の名簿を完成した(2005年、79歳)。この本は、その作業経過を語るとともに、回想記に見える死亡記述と自己の名簿の記載事項との比較、検証も紹介している。旧ソ連が長らく抑留死亡者に関する情報を提供せず、ゴルバチョフによる名簿持参と抑留者に関する協定締結、エリツィンによる謝罪と東京宣言で「幕引き」したかのような現状を批判し、死亡者名簿のさらなる入手や「登録簿」(厚労省保管、但し「個人情報保護法」により個々人につき親族しか閲覧できない)のデータベース化を訴えているのは、かかる名簿作成者ゆえに説得力がある。

*

*

*

第五に、ロシア人及び日本人研究者の著作がある。まずロシア人の著作の翻訳としては、クズネツォフ『シベリアの日本人捕虜たち』(1999年)、カルポフ『スターリンの捕虜たち』(2001年)、カタソノヴァ『関東軍兵士はなぜシベリアに抑留されたか』(2004年)、ベズボロドヴァ『もう一つの収容所群島—ソ連捕虜抑留者管理総局(グプヴィ)の歴史』(2004年)がある。

いずれも公文書館文書に基づいた研究で、捕虜収容システムを成立(1939年9月ソ連のポーランド侵攻)に遡り、大戦中及び大戦後の活動に即して分析したものがベズボロドヴァ著である。収容所の実態(給養、労働、保健衛生、埋葬、政治教育等)をイルクーツク州に即して包括的に解明したのがクズネツォフ著である。彼は、抑留体験者の墓参と遺骨収集に協力し、埋葬地の発見、維持にも努めてきたが、2011年10月東京で行われたシンポジウム「戦後66年シベリア抑留を問う」でも報告者の一人となった。カルポフ著は、日本人抑留者の政治教育と本国送還に重点を置き、ロシア人でもアクセスの困難な国防省中央公文書館の公文書を多用した点に特徴がある。カタソノヴァは全抑協斎藤会長の秘書として活動した日本研究者で、上の著作は、抑留と送還をめぐる米ソ間の抗争、送還実現のために赤十字が果たした役割、日ソ国交正常化過程における抑留者問題の扱い等を明らかにしたものである。タイトルが内容を表現していないこと、誤訳が目立つことが惜まれる。

日本人研究者の著作としては、まず阿部軍治『慟哭のシベリア抑留』(2010年)が挙げられる。これは大著『シベリア強制抑留の実態』(2005年)の簡約版で、抑留の実態(抑留者数と配置、移送、管理、食糧、労働、死亡者数と死亡状況、埋葬と墓地)を解説したものである。ただ、阿部は先述の『戦後強制抑留史』執筆陣の一員であり、厚生省(引揚援護庁)文書と最新のロシア抑留資料集及び研究書を用いてはいるものの、自ら公文書そのものに当たってはいない。長澤淑夫『シベリア抑留と戦後日本』(2011年)は、日本史研究者として抑留者団体の運動、とくに全抑協の労働補償を求める運動を丹念に分析したものである。先述の白井著が斎藤会長に焦点を当てたのに対し、団体に焦点を当て国会対策を含む運動の実相を、機関誌やインタビューを通じて明らかにしている。

筆者を世話人とする「シベリア抑留研究会」は2010年末発足であり、研究成果が本の形で出てくるにはもう少し時間がかかろうが、研究の現状と課題を概観した論文として、拙稿「日米ソ公文書に見るシベリア抑留」(2012年)があることを指摘して本稿を閉じたい。

文献

- 堀江則雄『シベリア抑留—いま問われるもの』（東洋書店、2001年）
- 味方俊介『カザフスタンにおける日本人抑留者』（東洋書店、2008年）
- 栗原俊雄『シベリア抑留は「過去」なのか』（岩波書店、2011年）
- 栗原俊雄『シベリア抑留—未完の悲劇』（岩波書店、2009年）
- 白井久也『検証 シベリア抑留』（平凡社、2010年）
- 白井久也『ドキュメント シベリア抑留—斎藤六郎の軌跡』（岩波書店、1995年）
- 高杉一郎『極光のかげに—シベリア俘虜記』（岩波文庫、1991年）
- 長谷川四郎『シベリヤ物語』（講談社文芸文庫、1991年）
- 『石原吉郎詩文集』（講談社文芸文庫、2005年）
- 加藤九祚（きゅうぞう）『シベリア記』（潮出版社、1980年）
- 内村剛介『スターリン獄の日本人—生き急ぐ』（題名変更）（中公文庫、1985年）
- 辺見じゅん『収容所から来た遺書』（文藝春秋社、1989年）
- 朔北会『朔北の道草』全2巻（1977年）
- ソ連における日本人捕虜の生活体験を記録する会『捕虜体験記』全8巻（1998年）
- 平和祈念事業特別基金『戦後強制抑留史』全8巻（2005年）
- 村山常雄『シベリアに逝きし46300名を刻む—ソ連抑留死亡者名簿をつくる』（七つ森書館、2009年）
- クズネツォフ『シベリアの日本人捕虜たち—ロシア側から見た「ラーゲリ」の虚と実』（集英社、1999年）
- カルポフ『スターリンの捕虜たち—シベリア抑留／ソ連機密資料が語る全容』（北海道新聞社、2001年）
- カタソノヴァ『関東軍兵士はなぜシベリアに抑留されたか—米ソ超大国のパワーゲームによる悲劇』（社会評論社、2004年）
- ベズボロドヴァ『もう一つの収容所群島—ソ連捕虜抑留者管理総局（グブヴィ）の歴史』（長勢了治〔個人出版〕、2004年）
- 阿部軍治『慟哭のシベリア抑留—抑留者たちの無念を想う』（彩流社、2010年）
- 長澤淑夫『シベリア抑留と戦後日本—帰還者たちの闘い』（有志舎、2011年）
- 富田武「日米ソ公文書に見るシベリア抑留—急がれる公文書開示と実態解明」、『ロシア史研究』第90号（2012年5月）